

日本における共生ケア研究の現状

田中 昌美*

The Current State of Research on Symbiotic Care in Japan

Masami TANAKA*

1. はじめに

厚生労働省は2016(平成28年)年に「地域共生社会の実現」という理念を掲げ、少子高齢化と地方圏の急速な人口減少、介護の担い手不足に対応した包括的な福祉サービスの提供体制の整備を進めている。その取り組みの一つとして、これまで対象者の年齢や障害種別ごとに整備されてきたサービス提供体制を見直し、高齢者・障害児者のケアを同一の事業所で一体的に行う「共生型サービス」が2018(平成30)年に創設された。

共生型サービスの対象は、表1に示す「通所」「訪問」「短期入所」である。本制度の導入により、介護保険サービスまたは障害児者福祉サービスのいずれかの指定を受けている既設の事業所が、本制度を活用することで、もう一方の制度の指定を受けることが可能になった。

厚生労働省は本制度の創設の趣旨として、①障害者が65歳になり、介護保険の被保険者となった際に、使い慣れた事業所でサービスを利用しやすくする。②福祉に携わる人材に限りがある中で、地域の実情に合わせて、人材をうまく活用しながら適切にサービス提供を行えるとしている¹⁾。同省は本制度の人員配置、報酬等については規定しているが、サービスの理念や方針については、第142回社会保障審議会介護給付費分科会の参考資料4「共生型サービス(参考資料)」において、実践例として富山型デイサービスを取り上げ、「高齢者だけでなく、障害者、子どもなど、多様な利用者が共に暮らし、支え合うことでお互いの暮らしが豊かになる。子どもと関わることで、高齢者のリハビリや障害者の自立・自己実現に良い効果を生む。」²⁾と述べるにとどまっている。

共生ケアの取り組みは、富山県で1993(平成5)年に開設された民間デイサービス「このゆびとーまれ」が、年齢や障害の有無を理由に利用を断らないことを方針とした活動に端を発する。2001(平成13)年に開催された「タウンミーティングinとやま」において、「このゆびとーまれ」は、自らのケア実践に対し「共生型」という名称を提案した。2003(平成15)年に富山県が、この取り組みに対して「富山型デイサービス推進特区」を申請し、認定を受けたことで国の公的な制度が適用されるようになり、さらに2006(平成18)年には、本特区の特例措置が全国において実施できるようになった。富山県における共生ケアの取り組みは、長野県にも波及して「宅幼老所」が整備された。これら以外に地域住民の交流の拠点として、高知県の「あつたかふれあいセンター」、熊本県の「地域の縁側」、東日本大震災の被災者に対する支援としての共生型福祉施設の設置・運営の推進など、各地で共生ケアの実践

表1 共生型サービスの対象サービス

*療養通所介護は自立訓練を除いたサービスが提供可能
出典：厚生労働省 第8回「障害福祉サービス等報酬改定検討チーム資料2

介護保険サービス		障害福祉サービス等
訪問介護	⇔	居宅介護 重度訪問介護
通所介護 地域密着型通所介護 療養通所介護*	⇔	生活介護 自立訓練(機能訓練・生活訓練) 児童発達支援 放課後等デイサービス
短期入所生活介護 (介護予防を含む)	⇔	短期入所
小規模多機能型居宅 介護 (介護予防を含む)	⇒	生活介護 自立訓練(機能訓練・生活訓練) 児童発達支援 放課後等デイサービス
・泊り	⇒	短期入所
・訪問	⇒	居宅介護 重度訪問介護

*本学教授
報告(資料・報告)：2019年1月25日受付 2019年1月30日受理

が展開している。2015年の時点で17都府県、1,375箇所の共生型施設が確認されている³⁾。

今後、共生型サービスが広く普及するには、共生ケアの理念を広く伝え⁴⁾、ケアのありようや価値を明らかにする必要があると指摘されている^{5) 6)}。さらに共生型サービスでは、これまで属性別に行われてきた専門的なケアを越える展開が求められ、新しいケアに対応できる人材の育成と研修体制の整備が求められている^{1) 5) 7) 8)}。

本稿では、これらの論点を中心に、これまで蓄積されてきた共生ケアについての議論を整理し、今後期待される研究の方向性について考察することを目的としている。

共生ケアの研究は大別して制度・政策に焦点を当てた研究と、実践に焦点をあてた研究とに大別できるが、本稿では後者の研究を中心に検討を行う。

国立国会図書館サーチを用いて「共生ケア」「共生型ケア」「共生型サービス」、そして「富山型デイサービス」をキーワード^{注1)}として検索を行ったところ、2019年1月現在、119編の著書、論文、記事が抽出された。本稿では先に述べた、共生型サービスの普及に関する課題を中心に、これらの文献における論考を整理し検討する。

2. 「共生ケア」とは

まず、従来の属性別に行われてきたケアと共生ケアとの違い、共生ケアの定義について確認しておきたい。

従来の属性別に行われてきた専門的ケアは、個別のニーズの充足に重点がおかれていたが、共生ケアでは個別の支援以上に利用者相互のかかわりに支援の重点をおき、共生ケアにかかわる多様な人々の相互の関係をダイナミックに構築していく支援であると考察している^{6) 8)}。

次に共生ケアの定義を確認すると、平野 (2005)⁹⁾ は、地域への展開も視野に入れて共生ケアを①地域に開かれた小さな居場所を提供し、②利用者の属性を限定せず、③共に生きるという新たなコミュニティを形づくると定義している。また、多様な人々の相互の關係に着目した定義として、賀戸・林 (2005)¹⁰⁾ は、「『共生ケア』は人間關係が基本」であるとし、「『共生ケア』は、差別を克服する視点から人間の多様性や差異を重視する」と定義している。西山 (2016)¹¹⁾ は、共生型サービスは、高齢者、障害者、子どもとの間に交流が生まれることから、「共生 (共に生きる)」という言葉

が使われていると述べ、平野 (2018)⁵⁾ は共生型サービスにおけるケアについて「多世代とかかわることによって新たな人間關係が生まれ、利用者が關係を深めたいくなることで成立します」と言及している。高橋・池田 (2019)⁸⁾ は「共生型とは、多様な人びとがただ1か所にいることではなく、それぞれの人に役割がある一種の生態系である」と提言している。

以上によれば、共生ケアとは、年齢や障害の有無などを問わず多様な人々が、地域に開かれた小規模な居場所を共有することが条件の一つであるといえる。そしてさらに、人々が、単にその場所にいることや、人々がその場でケアを受けるだけでは共生ケアは成立せず、多様な人々がそれぞれ役割を獲得するような主体的なかかわりが生まれることによって共生ケアが成立するという。そして共生ケアでは個別のニーズの充足以上に、その人の主体的なかかわりを支援することに重点が置かれる。

3. 共生ケアの価値とは

共生ケア施設・事業所の運営者らは、共生ケアにおける多様な利用者相互の交流の効果について、積極的な発信をしている。富山型デイサービスの創設者である惣万佳代子は、年齢や障害の有無を理由として利用を断わらない方針が、多様な利用者同士が互いに刺激し合うという相乗効果を生み出し、高齢者は子どもをかわいがる一方でしつけにも厳しく、その中で子どもは基本的なマナーを身につけていくと言う^{12) 13)}。その例として惣万 (2009)¹⁴⁾ は、「認知症のお年寄りが赤ちゃんをおんぶする。(中略) 昔取った杵柄である」と述べ、認知症の高齢者に対し「人の役に立っている、自分にできることがいくつもある、という意識をもつように働きかける」というケア方針を紹介している。

民間福祉施設「元気な亀さん」の運営者である瀧本信吉 (2008)¹⁵⁾ は、事業所での自閉症児と高齢者とのかかわりを取り上げ、「お年寄りたちはまるで自分のひ孫のように、われ先にとかわいがってくれた」と述べ、「お年寄りは子どもから元気の素をもらい (中略)、子どもはお年寄りから優しさを享受し、知恵を授かる」と主張している。これら運営者らは、多世代の利用者が場を共有することで、そこに家族的で豊かな交流が生まれ、利用者が役割や生きがいを獲得すると提唱している。

共生ケアにおける利用者相互のかかわりの実態を明らかにしようとする研究も始まっている。上野 (2011)¹⁶⁾

は共生ケアの嚆矢であるデイサービス「このゆびとーまれ」と、高齢者のみを対象としているデイサービスとの定点調査の結果を比較し、前者では一斉に行われるレクリエーションの活動が殆どないため、無為に含まれる行為が多く、会話も少ないが、後者のデイサービスのように会話の波がなく、コンスタントに会話が行われていると報告している。

建築学の分野では、共生ケア施設の建築形態と利用者の行動との関連を検証する研究が行われており、詳細な行動観察調査の結果から、利用者相互のかかわりの実態について興味深い知見が示されている。利用者相互の交流は建築形態が与える影響だけでなく、個々の利用者のコミュニケーション志向や能力、交流機会の提供の有無などの要因が影響していることが指摘されている^{17) -19)}。これらの研究では、他者と一緒にいること、視線を向けることや視線を気にすること、隣室の気配を感じることで、障害児が散らかした玩具を高齢者が片付けるというような行為もかかわりとして捉えており^{17) -19)}、交流の意味について考えさせるものである。共生ケアでは、人々が相互に交流し、それぞれの人が役割を獲得することが求められている。しかし多様な人々を対象とする共生ケアでは、他者との距離が必要な人、コミュニケーションが困難な人もおり、他者とのかかわり方も多様である。行動観察調査により明らかにされたかかわりの行為は、共生ケアにおけるかかわりの枠組みや、そこから生み出される意味を捉え直す必要があることを示唆するものであるといえよう。

4. 共生ケアの困難さ

多様な利用者同士のコミュニケーションはポジティブな側面だけでなくネガティブな側面もある。子どもを好まない高齢者や障害者がいることから、滞在スペースが狭い場合は共存が難しいという考察もある²⁰⁾。共生型では、子どもが苦手な高齢者はもともと利用しないという¹⁶⁾。また、認知症高齢者や子ども、障害児者は、日常生活のなかで相性が合わない人と距離を置くなどの対処が苦手であり、精神的動揺につながる場合があると指摘されている¹⁰⁾。

多様な特性を持つ利用者が交流する場では、重大な事故やインシデントが発生するケースもある。共生ケアの現場からは、障害児が突然走り出し高齢者におつかる、認知症の高齢者が子どもを叩くなどの事故・インシデントが報告されている²¹⁾。栗林・阿部(2010)²²⁾

は、富山県内にある富山型デイサービス事業所62箇所(有効回答58%)を対象にアンケート調査を実施したところ、2008(平成20)年度にデイサービスを利用した障害のある子ども419名のうち40%に問題行動が認められ、その中で最も対応に困る行動は「他人の体をつねったり、叩いたりして傷つける」「こだわりがあること」「排泄や食事などの身辺処理面での意思疎通に困難がある」「突然どこかへ飛び出す」であり、こうした行動が1日に4回以上起きている子ども達が半数近くいると報告している。

同アンケートでは障害児の問題行動があっても改善の必要がないとする回答があり、こうした対応は、子どもをあるがままに受け入れるという富山型の理念が影響しているのではないかと考察している²²⁾。

阿部・栗林(2011)²³⁾は、障害のある子どもの自発的な活動を尊重する富山型デイサービスでは、子どもが対応に困る行動を示した際は、一対一で対応できるようボランティアを配置する、子どもが落ち着ける場所、および子どもが満足するまで活動できる場所を確保するなどの対応を行っているという。とはいえ、子どもが自由に遊ぶことのできる十分なスペースや、多くのボランティアを獲得するのは簡単なことではない。

5. 支援者に求められる役割とは

先に触れたように、共生ケアの支援者には、従来の専門的なケアとは異なる役割が求められている。図1と図2は、三菱UFJリサーチ&コンサルティングが、2017(平成29)年度に「介護保険、障害福祉両制度活用事業所」と「その他共生サービス事業所」の全国300事業所を対象として実施した調査の結果である。図1は、「事業者の視点からみた共生型サービスの効果・成果」に対する回答である。この質問では、「介護保険、障害福祉両制度活用事業所」では「多様な利用者を受け入れることで信頼を得られる」(53.5%)が最も多く、次いで「多様な利用者の中でコミュニケーションが増える傾向にある」(48.1%)である。

図2は、「現在感じている運営上の課題」に対する回答であり、「介護保険・障害福祉両制度活用している事業所」では、「要介護の状態像や障害特性等が多様で個別ケアの実施に苦労している」(42.8%)が最も多く、次いで「共生ケアに関する職員向け研修が少なく、受講機会を得にくい」(33.7%)であった。

前述したように、共生ケアでは個別の支援以上に関係性を豊かにする支援に重点を置くケアであると考え

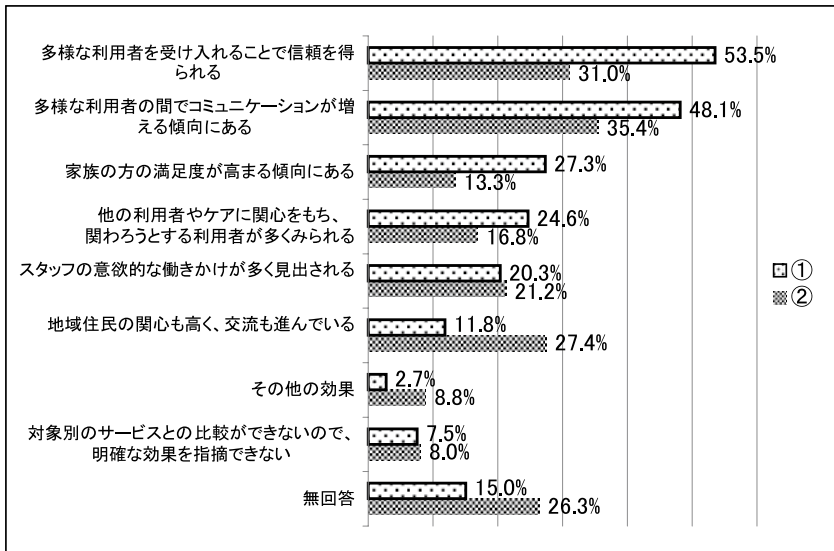


図1 事業者の視点からみた共生型サービスの効果・成果（複数回答）n=300
 ①介護保険、障害福祉両制度活用事業所（n=187） ②その他共生サービス事業所（n=113）
 出典：三菱UFJリサーチ & コンサルティング，2018，共生型サービスに係る普及・啓発事業報告書

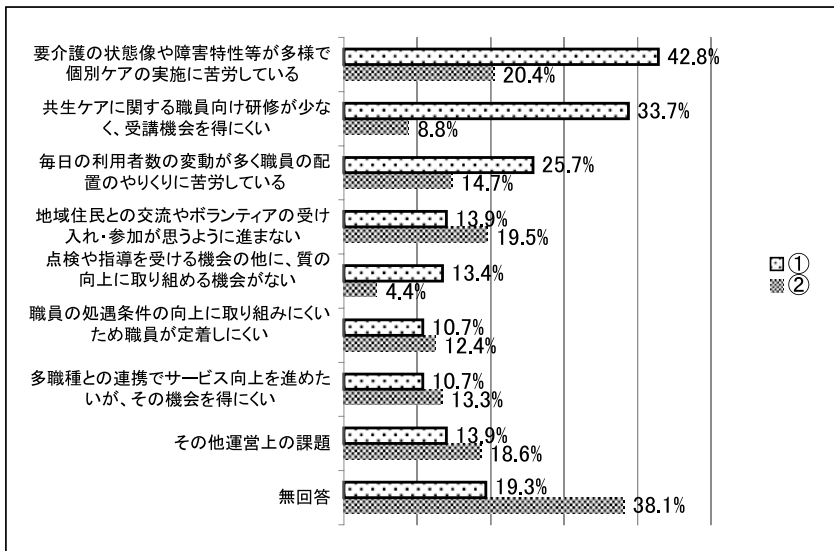


図2 現在感じている運営上の課題（複数回答）n=300
 ①介護保険、障害福祉両制度活用事業所（n=187） ②その他共生サービス事業所（n=113）
 出典：三菱UFJリサーチ & コンサルティング，2018，共生型サービスに係る普及・啓発事業報告書

られている。この結果を見る限り、事業所は共生ケアの効果を実感する一方で、年齢、障害の特性や状態に配慮した個別の対応に苦慮していると言える。福祉や医療の関係団体からは、共生型サービスの導入に際し、障害の特性、障害者と高齢者の支援内容の違いを踏まえたケアを行うこと、専門知識を得るための職員研修の充実を望む声がある^{1) 注2)}。共生型の事業所を運営する内海正子は、「障害児の療育をしっかりと行えば、地域で暮らしていけるようになって考えています。もし共生型サービスの現場に専門知識をもつスタッフがいなければ、障害児は共生の場で過ごしづらくなり、楽しく過ごすことができず、来られなくなってしまう

のではないのでしょうか²⁴⁾と述べている。共生ケアを実施しているデイサービスの職員が、障害のある子どもを理解するために研修に参加しているとの報告もある²⁵⁾。

共生ケアの支援者に対し、個々の障害の特性や障害の特性に応じた支援方法を習得すべきだという意見がある一方で、障害の特性を重視したケアについて疑問を投げかける見解もある。

平野 (2018)⁵⁾ は、「介護の現場にややもすると固定しがちな、障害や症状でケアのタイプ化を図ってしまうアプローチに修正を迫り、人（パーソン）重視を求めているのが共生型サービスなのです」と、共生型サービスの導入によるケアのあり方の転換について言及している。

支援者が直面する困難さの原因を、共生ケアにかかわる人々との関係性に焦点をあてて検討する研究がある。平野 (2005)⁹⁾ は、共生ケアを行うデイサービスの職員が、日々の業務を記録した日誌を詳細に分析し、職員は子どもの支援に重点を置くことで、高齢者のニーズを満たせないことや、地域を徘徊する高齢者の行動をめぐって「その人を支えるケア」と「地域とのつながりの支援」とのジレンマに陥っている職員の様子を紹介し、この要因の解明と対応策が重要な課題であると指摘している。

職員と障害児との関係に焦点をあてた研究として、阿部・栗林 (2010)²⁵⁾ は、富山型デイサービスにおいて、特に対応に困る行動がある障害児とかかわっている職員を対象に、子どもとのコミュニケーションの現状についてアンケート調査を実施した結果「職員については、子どもが示す問題行動をコミュニケーション行動として理解する視点が十分獲得されていない」と指摘し、「子どもと職員の双方に『伝わらない』というコミュニケーションの不成立があり、そのために問題行動が起きている可能性がある」と考察している。

これら支援者が直面している困難経験に焦点をあてた研究は、支援者が直面している困難の原因が、ケアを受ける者の特性にあるのではなく、その人を取り巻く他者や、地域との相互の関係性にあるということを示している。

次に支援者の役割について言及した研究について紹介する。従来の属性別に行われてきた個別ケアでは、ケアする者／ケアされる者という二者の非対称な関係において、個別ニーズの充足が目指されてきた。

しかし多様な主体が相互に関わることを支援する共生ケアでは、二者の関係が不明瞭になり、主体的に行動することを促すと述べている⁶⁾。放課後に共生型のデイサービスに通う障害児の支援について考察した阿部・栗林(2011)²³⁾の考察では、子ども達が自分で過ごし方を決めることが大切であり、それを保障する人材とは、あるべき姿を示して導こうとする専門家ではなく、その人のペースに合わせて、してほしいこと、してほしくないことを敏感に感じ取る人であると考察している。

つまり放課後デイサービスは、子ども達にとって、教育の場の非対称な関係から離れて、主体的な過ごし方を選択することができ、子ども達のケアされる者以外の役割を保障する場であるといえる。

共生ケアでは、支援者は利用者の主体的な行動に介入しすぎず、必要な支援は何かを見極めることがひとつの専門性だと考えられている³⁾。

こうした共生ケアにおける気付きや解釈について角田(2014)²⁶⁾は「語気の強さなどひとつひとつを、無意識のうちに状況から切り離し、それらを因果関係で説明しようとしてしまう」と、利用者間の関係性を因果論的なストーリーで解釈することの危うさを指摘している。さらに角田(2014)²⁶⁾は支援者が交流の場や機会を提供することにより、リアルな生活実感が欠け、他者との関係をつくりあげようとするプロセスに根本的な問題があると指摘している²⁶⁾。

支援者が持つケアに対する専門性や理念による視点の枠組みが、利用者を取り巻く関係性に対する解釈をゆがめ、自己決定のあり様に影響を与えてしまうということである。

6. 今後の研究の可能性について

最後に、本稿で紹介した共生ケアに関する論考を要約した上で、今後の研究の可能性について述べてみたい。

共生ケアと、従来の専門的なケアとを比較する考察

では、専門的なケアは、ケアする者／ケアされる者の非対称な関係の下で、個別ニーズを充足することに重点が置かれていたため、「ケアされる者」という役割が固定されがちであったとされている。一方で共生ケアでは、ケアされる者が主体的に他者とかわることに支援の重点が置かれることにより、ケアする者／ケアされる者との関係が曖昧になり、ケアされる者は、多様な他者とのかわりの中で役割を獲得すると考えられている。

建築学の分野では、共生ケアの場におけるかわりの実態を行動観察調査により明らかにしようとする研究が始まっている。これら研究は、かわりを会話や身体行為を伴うものだけでなく、他者と一緒にいることや、視線を向けることなど、多様なかわりの様相があることを提示している。今後の研究の可能性として、かわりの概念を狭く捉えず、様々なかわりから生み出される役割や意味を、支援者のみならず、ケアの受け手の視点からも明らかにすることが求められる。

共生ケアでは、多様な人々相互の関係から同時に異なる欲求が生まれることがある。そうした局面において支援者はジレンマに陥りつつ相互の欲求を調整することが求められる。支援者がこうしたジレンマに対していかに対処しているのか、その経験を描き出すことも今後期待される研究課題である。

さらに、支援者には、言葉にならないものも含めて、その人を取り巻く人々の関係性と、その中から生み出される意味を解釈することが求められている。そうした支援者による行為の意味づけや、解釈の枠組みを明らかにすることも、共生ケアの実践に貢献する重要な課題といえる。

そして、これらの課題を明らかにする方法として、当事者の声を含むインタビューやフィールドワークなど、多様なアプローチによって共生ケアのリアリティに迫る研究が行われることが期待される。

注

- 1) 年齢や障害の種別等を問わず同一の事業所で同時にケアを提供する実践は、「共生ケア」の他に「共生型ケア」とも呼ばれる。今回は、これらに加え、事業名である「共生型サービス」、共生型サービスのモデルでもあり、共生ケアの最も広く知られた実践である「富山型デイサービス」もキーワードに加えた。
- 2) 2018(平成30)年に創設された共生型サービスの

運営基準には、介護保険サービスと障害児者福祉サービスの両事業所に対し、新たに指定を受ける場合は、それぞれの技術的支援を受けることが定められている。しかし支援の内容は、国から示されておらず、新たに申請する種別に該当する既存の事業所から職員を招いて研修を行う、あるいは事業所に出向く形がとられている。

引用文献

- 2) 厚生労働省 2017a 第142回社会保障審議会介護給付費分科会 参考資料4「共生型サービス(参考資料)」(2018年10月12日取得, https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000170292.pdf) 1.
- 5) 平野隆之 2018 特集みんなで作る共生型サービス: 共生型サービスの普及への期待と挑戦ふれあいケア24 (1) 33.
- 8) 高橋誠一・池田昌弘 2019 地域共生社会を見据えた共生型サービスのための人材育成と支援 エイジングアンドヘルス27 (4) 19.
- 10) 賀戸一郎・林裕一 2005 幼老共生ケアに関する研究: 「このゆびとーまれ」の実践を中心に西南学院大学教育・福祉論集4 (2) 611.
- 14) 惣万佳代子 2009 あったか地域の大家族: 富山型デイサービスの14年 老年歯科医学23 (4) 379-80.
- 15) 瀧本信吉 2008 元気な亀さん物語: 幼児から高齢者まで共生ケアの源流 筒井書房 37, 47.
- 24) 内海正子・瀧本信吉・宮島 渡 2018 特集みんなで作る共生型サービス: てい談 地域共生社会を広げるために: 共に生きることふれあいケア24 (1) 16.
- 25) 阿部美穂子・栗林陸美 2010 富山型デイサービスにおける障害のある子どもたちと職員のコミュニケーションに関する調査研究 富山大学人間発達科学部紀要5 (1) 46.
- 26) 角田雅昭 2015 高齢者と子どもの共生ケアにおける「現在」めぐる考察 地域福祉サイエンス 22 57.

参考文献

- 1) 厚生労働省 2017b 第16回障害福祉サービス等報酬改定検討チーム資料1「共生型サービスに係る報酬・基準について<論点等>」(2018年11月28日取得, <https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai->

12201000-Shakaiengokyokushougaihokenfukushibu-Kikakuka/0000187125.pdf)

- 3) 全国コミュニティライフサポートセンター 2016 「多世代交流・多機能型福祉拠点のあり方に関する研究」報告書(2018年10月12日取得, www.clc-japan.com/researches/attachment/6)
- 4) 三菱UFJリサーチ&コンサルティング 2018 共生型サービスに係る普及・啓発事業 報告書(2018年12月10日取得, https://www.murc.jp/uploads/2018/04/koukai_180418_c4.pdf)
- 6) 森田麻記子 2018 共生ケアの効果と新たな価値: 変化する自立支援の意味と介護サービス 研究レポート 富士通総研経済研究所編 459 (2018年11月14日取得, <http://www.fujitsu.com/jp/Images/no459.pdf>)
- 7) 平野隆之 2019 共生型ケア拠点の政策化の経過と今後の課題エイジングアンドヘルス27 (4) 6-9.
- 9) 平野隆之 2005 序章「共生ケア」の分析枠組み 平野隆之編共生ケアの営みと支援: 富山型「このゆびとーまれ」調査から全国コミュニティライフサポートセンター 9-16.
- 11) 西山裕 2016 都道府県の地域福祉施策における共生型事業推進施策の意義 年報公共政策学10 187-212.
- 12) 惣万佳代子 2003 明日の100人を救うより今日の1人を救え富山県民間デイサービス連絡協議会編富山からはじまった共生ケア: お年寄りも子どもも障害者もいっしょ 全国コミュニティライフサポートセンター 10-23.
- 13) 惣万佳代子・中島英里 2004 この人に逢いたい デイケアハウスこのゆびとーまれ 理事長 惣万佳代子 "あるがまま"を大切にする心が生んだ、「富山型デイサービス」という介護のひとつの形 りぶる23 (3) 19-23.
- 16) 上野千鶴子 2011 ケアの社会学: 当事者主権の福祉 社会へ 太田出版.
- 17) 江文菁・佃悠・藤井容子・岡本和彦・西出和彦 2012 富山型デイサービスにおける空間構成と利用者のかかわりに関する研究: 地域共生ケアホームに関する研究 日本建築学会計画系論文集 77 (675) 987-94.
- 18) 藤井容子・若林清彦 2016 高齢者や障がい者が共に暮らす共生型グループホームの実践的研究: 新たな福祉施設・地域福祉システムの形成に向けて

住総研研究論文集42 37-48.

- 19) 山崎有香・生田京子 2018 共生型福祉施設における建築形態と利用者交流について（愛知県の場合）日本建築学会東海支部研究報告集56 493-96.
- 20) 宮崎幸恵・鈴木博志 2003 富山県における小規模民間デイサービス施設について：高齢者の住生活を支援する社会的仕組みづくりに関する基礎的研究その9 学術講演梗概集. F-1都市計画 建築経済・住宅問題 843-44.
- 21) 富山ケアネットワーク編 2007 共生ケアひやり・はっと集：家庭でも役立つ：リスクと上手につきあおう 全国コミュニティライフサポートセンター.
- 22) 栗林陸美・阿部美穂子 2010 富山型デイサービスにおける障害のある子どもたちの問題行動に関する調査研究 富山大学人間発達科学部紀要 4 (2) 55-66.
- 23) 阿部美穂子・栗林陸美 2011 障害のある子どもの充実した放課後生活を実現する富山型デイサービス活用のあり方を探る とやま発達福祉学年報2 23-12.